

第 43 回日本病院薬剤師会近畿学術大会

抄録要旨

カテゴリ：がん領域

当院におけるトラスツズマブ デルクステカン投与時の制吐療法の調査

○大久保友貴¹⁾ 大原沙織¹⁾ 藤永仁美¹⁾ 川高菜緒¹⁾ 沼田範子¹⁾ 岸本静佳¹⁾

高尾信太郎²⁾ 津田政広³⁾ 上田里恵¹⁾

1) 兵庫県立がんセンター薬剤部 2) 兵庫県立がんセンター乳腺外科 3) 兵庫県立がんセンター消化器内科

【はじめに】トラスツズマブ デルクステカン(以下 T-Dxd)は 2020 年 3 月に乳癌、同年 9 月に胃癌で承認されたが、主要副作用である悪心・嘔吐に対する標準制吐療法は確立されていない。

【目的】今回、T-Dxd 投与時に当院で行っている制吐療法(アプレピタント、デキサメタゾン、5-HT₃拮抗薬)の妥当性を検証した。

【対象と方法】2020 年 5 月～2021 年 7 月まで T-Dxd 導入となった患者 10 例(乳癌 7 例、胃癌 3 例)を対象に電子カルテで後方視的に調査した。調査項目は有害事象のうち悪心・嘔吐とし、評価指標として CTCAE v5.0 を用いた。

【結果】T-Dxd 使用症例において全 10 例中 PD となった症例が 3 例、継続中の 7 例の投与回数は 3-17 (中央値 13) であった。悪心・嘔吐の発現状況は、悪心の Grade1 が 2 例、Grade 2 が 2 例、嘔吐の Grade 2 が 1 例であった。悪心・嘔吐による減量、延期はなかった。追加の制吐剤を使用したのは 8 例であった。アルプラゾラムが 6 例に使用され、うち初回のみが 4 例、3 コース目までの使用が 2 例、いずれも頓用であった。メトクロプラミドが 5 例に使用され、うち 2 例は初回及び 2 コース目までの頓用であった。他 3 例は 4 コース目以降の継続使用であり、うち 1 例は定期内服、他 2 例は頓用であった。オランザピンは 4 例に使用され、うち 2 例は初回のみが頓用であった。他 2 例は 2、3 コース目からアルプラゾラムから定期内服として変更された。

【考察】T-Dxd 投与時に当院で行っている制吐療法(アプレピタント、デキサメタゾン、5-HT₃拮抗薬)下では、悪心・嘔吐が理由で T-Dxd 投与が中止・減量された症例はなかった。また今回の調査では多くの症例に追加の制吐剤が使用されており、制吐剤を追加することにより悪心・嘔吐の症状をコントロール出来たと考える。しかし、追加する制吐剤の種類、投与タイミングは未確定であり、より制吐効果を上げるために、薬剤師としてどのような介入ができるのかを今後症例を重ねて検討していく必要がある。

